

2. 話題提供

いまなぜ民藝か？

明治大学理工学部 准教授 鞍田 崇

0. イントロダクション

ご紹介いただきました鞍田です。よろしくお願ひします。矢野さんが最前線というか現在進行形の、それこそ僕たちの暮らしをより豊かにしていく様々な努力や試みをご紹介してくれたので恐縮なのですが、僕はその背景にある歴史的なところで、民藝について触れたいと思います。

今矢野さんからもありましたけど、ちょうど先月から六本木にある 21_21 DESIGN SIGHT という所で「民藝展」が始まっています。画面左がそのチラシですけど、昨日からサテライトとして Gallery 3 という併設の展示施設で「民具展」が始まりました。朝一番、10時に行ってきたのですが、すごく空間がスマートで、今日は本当に天気もよかったです、古いものも新しいものも皆目が覚めたばかりのような感じで、パチクリとした感じが、どちらがどうかではなく使われるものの幸せのようなものを感じさせていただきました。



1. 民具と民藝

僕のほうからは言葉の説明をまず簡単にしたいと思います。先ほど矢野さんもちらっと触れられましたけど、「民具」も「民藝」も20世紀の初頭、1920年代につくられた造語です。ご存じのように民藝は、柳宗悦、この駒場キャンパスのすぐ隣にある日本民藝館を創設した思想家が中心になった民藝運動の中でつくられた言葉です。民具は主に民俗学の人たち、メインとなったのは渋沢敬三という、在野ではあるのですが民俗学の発展に寄与された方が中心になって使い始めた言葉といわれています。

実は、東大で柳が講演したことがありました。東大の人類学会で、本郷の方だと思うんですけど、「民藝学と民俗学」という講演をされていて、民俗学と民藝はどう違うのか、それはひいては民具と民藝はどう違うのかという話だと思うんですけど、そこで柳はこの講演の前年に行った民俗学の立役者である柳田國男との座談会を踏まえながら、自分たちの民藝は民俗学と違ってより価値を提案していくような点、古めかしい言い方ですが、「かくあらねばならぬ」という世界に触れていくと言っています。ただ事実を観察し分析して終わるのではなく、それに基づいてそれこそデザインしていくとか、プロジェクションしていくような方向性があり、価値を提起していくことを違いとして認めています。それを簡単に集合で表すと、こういう感じかなと思うんですね (図1)。いずれも生活道具を表す言葉ではあるのですが、民具というものが特にことさらな違いとか価値的な判断をしない言葉であって、大きな集合で表されるのに対して、民藝は明らかに小さなサークルで、選択という眼差しが入っているのです。その選択というのは美的な視点で、生活道具の中でもとりわけ手仕事になる古い道具なんですけど、その中でとりわけ美的な視点でこれはというものを選びすぐってきた世界が民藝でした。

併せて、ここで言っている生活道具というのは、民俗学が扱う民具もそうかと思うんですけど、元々近代化によって忘れ去られようとしていたある種前近代的な、土着の伝統的な生活道具のことを当時は指したと思うんです。いっぽうで、民藝というのは言ってみればそういう過去のものに甘んじず、

そこに手がかりを求めながら、つまり美的な視点から選んできたものに手がかりを得ながら、それを踏まえて今、さらには将来どういうくらしや社会、ものづくりを営んでいくのかということを創造していく面もあります。だから輪っかははみ出していくというイメージで、僕は捉えています。柳がこういう図を描いているわけではないのですが(図2)、彼をはじめとした民藝運動が志したことを簡単に可視化するとこういうことだったかと思うんですね。

実際彼も『工藝の道』(※1)という代表的な著作の中で、自分たちのことは「価値顛倒」、これまで当たり前だったことをひっくり返す、これまで見過ごされていた世界に光を当てるような、単に価値を提案するだけではなくてひっくり返すくらい勢いで、今まで世間が当たり前と思っていた世界に甘んじず次の世界の構築へと積極的に進んでいくという話をしているんですね。

2. 民藝は人間性の回復をめざした

柳は1889年(明治21年)の生まれなんですけど、ちょうど同年の哲学者のハイデガーという人がいました。ハイデガーもよく似た思想的な歩みを遂げるのですが、戦後の講演『建てる・住まう・考える』の中で、住まうことに固有の危機があると、それは人間、とりわけ現代人が故郷を失っている

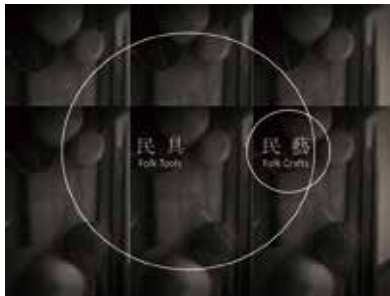


図1

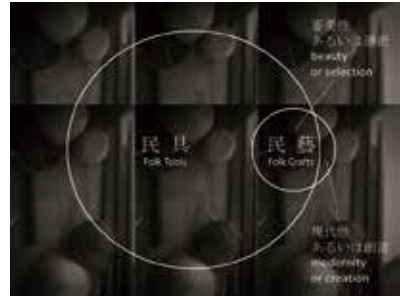


図2

※1 柳宗悦(2005)『工藝の道』, 講談社学術文庫, 368pp.

ことで、ドイツ語では Heimatlosigkeit という言い方をするんですね。そこには本来の故郷、これはあくまでもメタファーですけど、実際のふるさとはなくて、これは時間があればいずれまた議論したいと思いますが、いずれにせよあるべき人間性を失ってしまっている状態のことをこういうたとえで呼んだんですね。逆に言うと、あるべき人間性の回復を目指していたのが、広い意味でのハイデガーの立場でもあったと僕は思っています。

それはきっと民藝にもあったと思うんですね。ひっくり返すべき、つまり近代への歩みの中で、今に至るまでの系譜としてはつながっていると思うのですが、彼らが求めたあるべき社会、あるべきくらしの姿というのは、言ってみれば人間性の回復みたいな方向性をもっていたのではないかと思います。

それをどこに求めたかかという、それは選んできた世界ですよ。かつて生き生きとした生活を営んできた世界に彼らは参照例を求めたわけです。それはどういう世界かという、自然と結びついた美しさの世界でした。自然の素材、地域の技術、その土地の風俗・風習・習慣といった土地との結びつきや自然との結びつきを色濃くもった道具たちだったわけです。

写真(写真1)は、初めて民藝が建築として手がけられたときの建物ですが、その建物について建築家の堀口捨己は、「これは自然美にも比すべき美の世界だ」と評しています。人間性の回復としての現代性の追究、creationと並んで、図で示したもう一つの selection あるいは審美性の方は自然回帰といってもよいでしょう。ちなみに、これは地球研の英語名称に合わせてみたんですけど、Research Institute for Humanity and Nature ですよ。民藝の中にもそういう Humanity and Nature というもののあるべき姿を探るところがあったのだと思います(図3)。言ってみれば民藝はある種のオルタナティブな追求、民具という大きな領野から、それを手がかりにしながら次の社会、次の生活、ものづくりを通して、現状メインストリームとなっている姿の中に沈み込んでしまうのではなくて、そこでは得られなかった別の選択肢を模索していたと思うのですが、それは取りも直さずあるべき人間性と自然、そのつながりを模索する中でのことだったと思うんですね。

ざっとこれが民具と民藝の簡単な違いというか、民藝がことさら使命としてもっていたことです。おそらく良品計画さんがやっておられる仕事はこの

二つを行き来している感じで、まさに時代の最先端で取り組んでおられるのだらうと思うのですが、言葉の成り立ちからはそういう違いがあったということです。どちらがいい、悪いという話ではないことは言うまでもありません。

3. Off-Grid な人たちに柳らが重なる

そういう動きがたぶん今、社会の中でいろいろ出てきていると思うんですね。昨年渋谷のヒカリエで、Off-Grid Life という言葉をキーワードに掲げた展覧会が行われました。d47 ミュージアムという、47 都道府県から毎回何がしか代表例を取り上げて展示企画を手がけているギャラリースペースで、このときはこれからの暮らし方を Off-Grid Life と呼んだんですね。環境絡みのことをやっている、エネルギー問題などでよく耳にする言葉かと思うのですが、グリッド、設定された電力網に対して、その電力網のネットワークの中に取まらず自家発電や地域電力をやっていくのが Off-Grid ですよ。でも、ここではただのエネルギー問題だけではなくて、既存のネットワークや既存の価値観から敢えてはみ出して、農業やゲストハウス、子育てなどいろんなシーンで Off-Grid な人が出ていて、それを一回総ざらいしてみようという企画でした。この辺にもある種オルタナティブな追求というか、民藝から百年経っているわけですが、その現代版の動きが出てきていると思うんですよ。



写真1 出典「三國荘：初期民藝運動と山本爲三郎」
(アサヒビル大崎山崎山荘美術館, 2015.12)

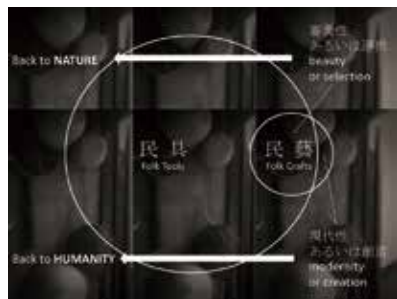


図3

僕自身はこういう仕事をしている中で、地球研のおかげでフィールドワークという大事なツールというかメソッドを手にして各地を回るようになったのですが、その先々でそれこそ Off-Grid な人たちに出会います。例えば新潟で写真集だけの本屋さんをやっている小倉快子さんという人とか、鳥取の倉吉の近くの中山間地で漆の修復家として、いわゆる割れた器などをつなぎ合わせる金継ぎなどを手がけている河井菜摘さんとか。彼女は元々関西の人なんですけど移住して、しかも東京にも拠点をもって、関西と東京と倉吉で3拠点生活をするような営みをしている人です。あるいは、民藝を扱うお店の中にも、従来の民藝店とは趣の違うような試みをしている所として、岐阜県の高山の中山間地でやはり古民家を移築して生活全体を自分たちでつくり直すというスタンスでやっている「やわい屋」の朝倉佳子さんという人がいたりします。

こういうシーンが今出てきているというところに重ね合わせていくと、先ほどまでは言葉の説明として時代がかったお話になりましたけど、柳らが100年くらい前にやったことが今まさに手探り状態で、それこそ20代、30代くらいの若い人たちが盛んに模索しているシーンと重なってくるような気がするんですね。というのは、若かりし頃の柳宗悦もそうだったからなんです。これは彼が20代の頃の写真ですが、思いきりガンをつけているというか、こいつとは友だちになりたくないなという感じですけど、当時彼は白樺派で、東京から抜け出て我孫子に移住していたんですよ。なんか全然変わらない気が僕はするんですよ。格好こそ着物を着ているんですけど、このときの柳の藐視みしたような顔つきと、地方で今アンテナを立ててエッジのきいた仕事をしている人たちは何も変わらないんじゃないかと思います。

4. 用と美

何も変わらないとはどういうことかという、実は民俗学も当時は同じ気分だったと思うんですね。柳田國男が35歳のときに書いた代表作が『遠野物語』(※2)です。この『遠野物語』の序文を読み直して、ビクツとした言

葉があったんですね。序文の第1段落を柳田は、「願わくはこれを語りて平地人を戦慄せしめよ」という言葉で結んでいるのです。逆に言うと、彼は民俗という近代によって駆逐されようとしている、あるいはそのまま無視されようとしている山の人たちのくらしや生活をもって、近代だ、オッケーだと言っている平地のくらしの人たちを見返してやるというか、「お前たちのくらしは本当のくらしか」というメッセージを託していたと思うんですね。民具あるいは民俗も決して時代と向き合わずに単なる記録に終わったわけではなくて、やはりながしかの時代へと向かう立ち位置をもっての世界だったと思うのです。

そう考えますと、一応民具と民藝を区別して考えたんですけど、本来追求されていることは同じかなという気もしてくるんですね。考えてみると、民藝が追求したことは自然への回帰と人間への回帰をただバラバラにやったわけではなくて、その二つのあるべき連関を問うたと思うのです。必然的な連関と言ってもいいかもしれません。それがかつては民具の世界には明らかにあったと。それを現代の仕方でどういうふうに戻していくのかを考えようとしたのが民藝の試みだったのだらうと思うんですね。言ってみれば、民藝というのはそういう意味で民具の中の最も民具らしい要素を、その自然系と人間系の二つの営みの連関、その結果としての美しさの世界に見出したわけですが、その上でもう一回それを現代へとフィードバックして、現代の形は何なんだということで、民具の中の本質的なものを現代へとどう継承していくのかという取り組みだったと思うのです。(図4)

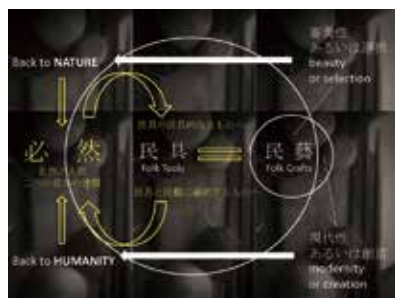


図4

※2 柳田國男 (2016) 『遠野物語』, 新潮文庫, 164pp.

どう取り組むのかというために柳宗悦という思想家が注目したのが「用と美」という世界でした。ここには、「用」に結びついた美しさがあるということです。よく「用の美」と言われたりもしますが、柳はあまりこの言葉を使っていないようで、最近では研究者の間でも「用と美」という言葉を使うよう心がけているそうです。代表作のもう一つに『民藝とは何か』(※3)という本があるのですが、この中で「用」についてのこんな説明があります。彼は「用というのは、単に物への用のみではないのです。それは同時に心への用ともならねばなりません。ものはただ使うのではなく、目に見、手に触れて使うのです」「用は美を育む大きな力なのです」と書いているんですね。大事なのは、心への「用」というポイントがあったことが一つ、そして最後の一文中にあるように、まず「美」ありきではなくて「用」という大きな地平のある中から「美」が育まれてくるという、「美」に先立つ「用」の世界に注目していると言ってもいいと思います。

これが先ほどの自然と人間の関係性にもつながってくるところかと思うんですけど、こういう言葉は古い民具にも通じるでしょうし、今どういう形で僕らは形づくっていくのかということが問われているということでもあると思います。とりわけ「心への用」というのは難しい言い方ですけども、この辺は後でディスカッションできればと思うのですが、僕らはそもそも物と用とちゃんと向き合っているんだらうかということも一方で考えさせられる側ですね。矢野さんの話を聞いていると、何の問題もなくて心配なさそうな気がしてきたんですけど、一方で僕らはどんどんモノから乖離している生活になっているとも思うんですね。

5. モノから離れていっている時代に

写真(※4)は一昨年 NOSIGNER というデザインの活動体がやった展示なのですが、真ん中に iPhone が置いてあります。そこから配電盤のようにた

※3 柳宗悦(2006)『民藝とは何か』、講談社学術文庫、200pp.

※4 下記 URL を参照。

NOSIGNER ホームページ内 ギンザ・グラフィック・ギャラリー 第355回企画展「ノデザイナー かたちと理由」
<http://nosigner.com/ja/case/the-355th-ginza-graphic-gallery-exhibition-nosigner-reson-behind-forms/>

くさん線が出ているのですが、配電盤の先にあるのはたくさんのモノたちだったんですね。デスクトップパソコンがあったりタイプライターがあったり、ポータブルテレビがあったり辞書があったり、カメラがあったりビデオがあったり、地球儀があったり……。つい10年ほど前までは、これだけのモノと一緒に僕たちは住んでいたんですよ。

ところが今は、この薄っぺらい端末一つで済んでしまって、どんどんモノから離れていっている。それは無印良品にも関わっていらっしゃる深澤直人さんも指摘していることです。「次第にかたちが失われ、機能だけが残って動く動きがある。今後、こうした状況はどんどん進んでいくでしょう」(※5)と。それは僕らが望んでいることだしそのことを否定はしません。うず高くモノが積み上がっているくらしよりもよりスマートに生きるという意味では、より心地よい生活を実現するツールであることは間違いないのですが、深澤さんはここで念押しというか、注意を向けているんですね。「その結果モノのない整然としたくらしが可能になるはずですが、ただし、これが機能や効率第一になると、今度はうるおいが欠けてしまう。そこであらためて浮かび上がってくるのが、壁になりきれないものや身体になりきれないものの存在です」とおっしゃっています。これは、無印良品のCompact Lifeというホームページから借用させていただきましたけど、まさにそこを良品計画は考えようとしていると思うんですね。何をかという、我々にとってのうるおいは何なのかとか、要は薄型テレビだったり天井一体型のエアコンだったり、モノがどんどんコンパクトになって生活から失われていく中で、そういう中に吸収されずにくらしに寄り添うモノの存在のあり様はどういうことなんだろうということが、今のこういう時代だから問われているのです。そのときに、柳が見つけた用の世界、「心への用」とか、日を育むベースとしての「用」がもう一回見直されるべきところかと思うんですね。

※5 深澤 直人「豊かさの新しいカタチ」 MUJI 無印良品 WEB サイト Compact Life (閲覧日：2019.2.28)
<https://www.muji.com/jp/compactlife/column002.html>

6. 「言いやうのない親近感」を現代に探る

そういうことを考えるときに、民藝ももちろん大事なんですけど、民具の世界、あるいは民具とか民俗とかを超えたところにもいくかもしれません。今日、バタイユ (ポスター G-05: 大池惣太郎) をやっていたという人もいらっしまったのでたぶん通じると思うのですが、『忘れられた日本』(※6) という著作についてご紹介したいと思います。

書いたのは、ちょうど2025年にふたたび大阪万博も開かれることになりましたけど、前の大阪万博で有名な岡本太郎です。岡本太郎は「沖縄文化論」という副題がついたこの著作の中で、すごく重要な指摘をいっぱいしているんですよ。それこそ先ほど矢野さんからもあったように、GDPが1/60だった頃です。1959年に彼は沖縄に行っているんですね。まだ本州の日本も戦後復興で高度経済成長期にさしかかる頃で、まだ慎ましやかな、modestな生活をしていたと思うんですけど、でも同時代の岡本からするとすでに忘れられつつあったものが沖縄にはあったと。そういう発見のルポルタージュなのですが、これはぜひ皆さんも、短くて文章も読みやすいので、ご自身で読んでいただきたいと思います。その最後に、岡本はこう言います。「われわれが遠く捨て去り、忘れてしまったはずの本来の生活の肌理が、意識下の奥底に生きている」と。どんなに時代が変わっても。「一種のキヨラカな呪術のように、われわれを縛りつづけるのだ。そしてそれが何らかの機会、たとえば芸術の表現によってむき出しにされたとき、われわれは不意に、言いやうのない親近感をおぼえる。それは生甲斐だからだ」という、なんとも印象的なフレーズで結ばれています。生甲斐といきなり出てきた感じなのですが、このままブツツと物語は終わります。ここで岡本は「芸術の表現によってむき出しにされた」と言っていますが、これは芸術ということに限らず、例えば古い民具や民藝を見たときにも僕らは何か胸騒ぎするように感じるものかもしれませんし、その他にもいろいろとあると思うんですよ。何かそうやって自分たちの中で眠ってしまっているものをもう一回呼び覚ますタイミ

※6 岡本太郎 (1961) 『忘れられた日本 - 沖縄文化論』中央公論社, 159pp.

ングにも今来ているのかもしれませんが。でも、それは何も古いものだけではなくて、最先端のもの、新しいものとの触れ合いや発信のされ方、その心遣いなどを通して気づかされることもあるでしょうし、そこを何か覚醒したい気分は時代の中で起こっているのかなという気がしています。

大事なところとして僕が目指したいのは、ここで岡本が「言いようのない親近感」という表現で表しているところです。決して不気味なものではない。決して自分に無縁なものではない。そういえばそうだった、よく「懐かしい」というフレーズでも表されるものかもしれませんが、それが実は僕らに大きな気づきの一歩、あるいは変化の一歩を踏み出させるということだと思うんですね。まさに、実は柳が民藝に見出したのはそういう世界でした。柳は「用」ということを言いましたけど、「工藝の美の本質は親しさである」と。価値をひっくり返すんだといった『工藝の道』の中の、一番冒頭で言っているんですね。これに先立つところから彼は朝鮮の生活文化と触れる中で、民藝という言葉をつくる前にまず実は親しさの世界、intimacyの世界に目覚めていって、それを具体化していったのが民具、民藝との出会いでした。歩みとしてはそうだったのですが、大事なのは近代の幕開けである20世紀初頭に、当時の皆さんくらいの世代だった若者がこのintimateな感覚に揺さぶられて新しい言葉を紡ぎ出し、新しい世界を切り開いていったところから100年経って、ご紹介したようないろんなOff-Gridな動きも出てきている中で、僕ら自身がもう一回現代のintimacyみたいなものを探るタイミングに来てるのかな、という点だと思うんですね。

6. 日常を紡ぐ先にあるもの

最後に、柳の文章、柳が物とどう向かい合ったのかということですが、すごくいい文章ですので、それをご紹介して僕の話結びたいと思います。

一昨年に日本民藝館が80周年を迎えました。東大の駒場キャンパスでシンポジウムが開かれて、僕もそのとき座談会に登壇させていただいたんですけど、そのときちょうど日本民藝館で開催されていた展覧会に合わせて、雑

誌「民藝」に柳の『買い物』という、短文が紹介されたんですね。この写真はその1960年のものでおじいちゃんになっている頃の柳です。

同じ雑誌「民藝」の73号、1959年の、奇しくも岡本太郎が沖縄に行った、あるいは1/60のGDPだった時代の文章です。盟友でもあった陶芸家の河井寛次郎の、「物買ッテクル、自分買ッテクル」という有名なフレーズがあります。物を買うということは、実は自分を買っているに等しい、物を選ぶということは自分を選ぶに等しいという、河井ならではの文があるんですけど、これにかこつけて柳は、自分にとっての買い物について、あるいは物との出会い方についてのエッセイを綴っているのです。

そこでまず、彼はこう言うんですね。「此の頃の私の感じでは、『物買ッテクル、大勢ヲ買ッテクル』という気持がしてならぬ。大勢の人の心が一緒になるその世界を買入れることにもなる。自分だけを買ってくるのではない。私は物を買うと、悦びを分つ友が何時も欲しい。それで、『物買ッテクル、友買ッテクル』と云い度い程である」と、シャレみたいなんですけど、こう言うんですね。さらに、「処が私は次のようなことも又気づいた。『私が物を買集める』というが、寧ろ『物が私を買う』のだと。否、本当は『物買ッテクル』のは、自分を物の友達にさせて貰うことである。切っても切れぬ間柄になることである。否、この頃の私の気持では『物買ッテクル、師ヲ見ツケテクル』という感じが強い」と。

先ほども非人間中心主義という発表(ポスターG-09: 時野真彩)があったんですけど、物の側が自分を引き寄せているみたいな話をしているわけです。また、この文章ではこんなふうに言っています。「考えように依っては、そこに自分の住む故郷、やすらいの場所を見出しているのだとも云える。美しい物を愛するのは、そこに一番慕わしい我が安住の家があるからとも云える」と言っていて、因らずも故郷喪失という言葉も紹介しましたが、どこか根無し草になったような形で浮遊してしまうところがあった近代社会の中で、もう一回モノを軸にして自分たちの身近なところから安心、安全、居心地のよさのようなものをつくり出していくことで、もう一回失われた故郷を回復しよう、みたいなところがやはり民藝の世界にもあったのではないかということをお話かがわせてくれる短文です。でもそれは日常の些細な買い物の中でみられる

ようなもので、急に大きな社会運動を起こすとか、革命を起こして政権をひっくり返すようなものではなくて、大事なのは個々のモノとの出会いからそれを紡いでいったということだと思うんですよね。

今日は人新世という、地質学年代を更新するようなでっかいスケールの言葉がありますけど、問われているのはたぶんこの日常なんですよ。日常の中で僕たちがどういう物を選び、どういうふうにそれを仲間と、近しい人と共有し楽しむという、そこから始まるんじゃないかということだと思うのです。柳の文章は時としてすごくシュプレヒコールを上げるような勇ましいものもあるのですが、この文章を読んだとき、僕はすごく安心しました。この人も買い物をしたんだと。今も生きていたら無印良品に行ったんじゃないかなと思ったところで、僕の話をつなげていただきます。どうもありがとうございました。